

原家砥石の石材と下仁田砥会所

— 「下仁田の道」に係る歴史資料 —

Raw materials for the whetstone contributed by Mr. Hara and whetstone exchange house

— Cultural properties concerning “the way of Shimonita” —

中村由克^{*1}

Yoshikatsu Nakamura

キーワード：砥石、デイスaito、顕微鏡観察、下仁田宿、江戸時代

Key words : whetstone, dacite, microscopic observation, Shimonita post town, Edo Period

はじめに

2021年6月に下仁田町下仁田在住の原康文氏より、下仁田町自然史館に当家に保管されていた南牧産砥石6点の寄贈を受けた。これらの砥石は2018年7月から第2回企画展「下仁田道のルーツ・石器の道」の開催のために同氏より借用し、その後、常設展示に組み入れて引き続き展示していた資料である。

これらの砥石は、江戸・明治期に下仁田砥会所を営んでいた福田家の住宅と倉庫を取り壊した際、原康文氏によって発見されたものという。原家の記録には、砥石が12点あり、そのうち3点は南牧村民俗資料館に寄贈されている。残る9点のうち6点を下仁田町自然史館が借用し、今回寄贈された。

砥山があった南牧村でも、最盛期の江戸時代の砥石はあまり残っていないようである。南牧村民俗資料館の展示では、原家寄贈品を江戸時代の手加工の砥石として紹介されているが、このほかは昭和に入ってから丸鋸加工の砥石が多い。今回は創業当時の砥石の石材を調べるために、実体顕微鏡観察を行ったので、その記載を報告する。

さらに、下仁田ジオパークでは、2022年より新テーマ・ストーリーを決定した（ジオパーク下仁田

協議会テーマ・ストーリー検討委員会ほか 2022）が、そのストーリー3「東西の文化とモノの交差点」に関連し、「下仁田の道」に係る歴史資料としての意義についても論じたい。

原康文氏寄贈の砥石

原康文氏の下仁田町自然史館への寄贈資料は6点（原資料と表記する）である（第1図、口絵2-④）。また、南牧村民俗資料館への寄贈資料（南牧村展示資料と表記する）は3点であったが、南牧村民俗資料館の展示室で確認できたのは2点のみであった。本稿ではこれら8点の記載をおこなう（第1表）。

原資料（1～6）は最大のもの（1）が長さ 18.5 cm、幅 8.9 cm、厚さ 6.6 cmで、重量 2,259 gで、最小のもの（6）は長さ 10.5 cm、幅 5.4 cm、厚さ 3.5 cmで、重量 387 gであった。南牧村展示資料は、原資料よりも大きく、最大のは長さ 21.5 cm、幅 9.0 cm、厚さ 7.2 cmで、重量 2,675 gという立派なものである。典型的な特徴がみられる原資料2の展開写真を第2図に示す。

器体にはノコギリの痕跡はみられず、面によっては幅 1.5 cm程の整形痕が見られる。ただし、原資

2022年3月20日受付。2022年3月24日受理。

*1 下仁田町自然史館 〒370-2611 群馬県甘楽郡下仁田町青倉158-1

Shimonita Museum of Natural History, 158-1 Aokura, Shimonita-machi, Kanra-gun, Gunma, 370-2611 Japan



第1図 原康文氏寄贈砥石 1~6：下仁田町自然史館蔵，7・8：南牧村民俗資料館蔵

第1表 原康文氏寄贈砥石の一覧（法量：cm, g, 帯磁率： $\times 10^{-5}$ SI）

No.	名称	長さ	幅	厚さ	重量	色調	マンセル表示	帯磁率
1	原資料1	18.50	8.86	6.61	2259.4	灰白色	7.5Y7.5/1	20.2
2	原資料2	18.30	6.89	5.55	1499.3	灰白色	7.5Y7.5/1	18.0
3	原資料3	15.24	5.58	3.75	691.5	灰白色	7.5Y7.5/1	13.5
4	原資料4	14.20	5.39	3.33	552.4	灰白色	7.5Y7.5/1	13.8
5	原資料5	11.09	5.98	3.90	380.1	灰オリーブ色	5Y6.5/1	17.2
6	原資料6	10.53	5.39	3.52	387.4	灰白色	7.5Y7.5/1	13.8
7	南牧村展示資料1	21.50	9.00	7.22	2674.9	灰白色	7.5Y7.5/1	20.1
8	南牧村展示資料2	19.80	7.36	6.97	2052.9	灰白色	7.5Y7.5/1	6.1

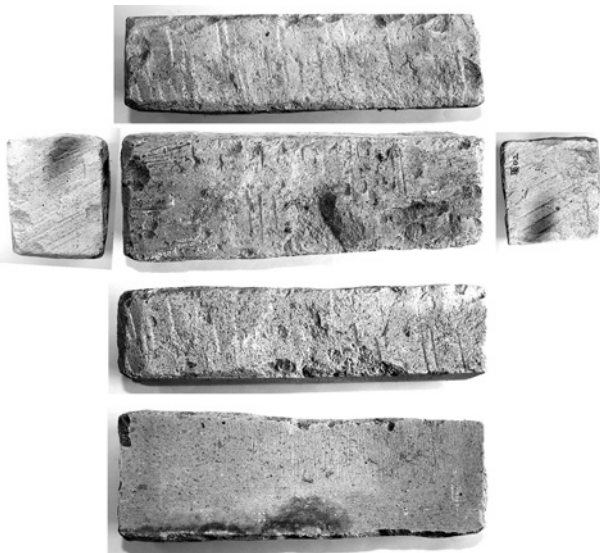
料2~4の3点の表面には磨いた跡が見られることから、近年までに砥石として使用されていたものと思われる。

砥石の石材記載

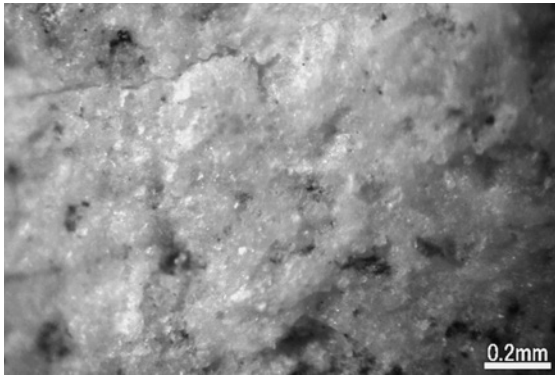
原資料1~4, 6, および南牧村展示資料1, 2の7点は、剥落箇所など新鮮面で灰白色（土色帖（小山・竹原 2014）のマンセル表示で7.5Y7.5/1）を呈し、原資料5のみが新鮮面がみられず風化面で灰オリーブ色（同5Y6.5/1）を呈する。

いずれもあまり大きな含有物を含まず、少し表面に小さな孔があり、比較的緻密な石質である。実体顕微鏡写真を第3図に示す。

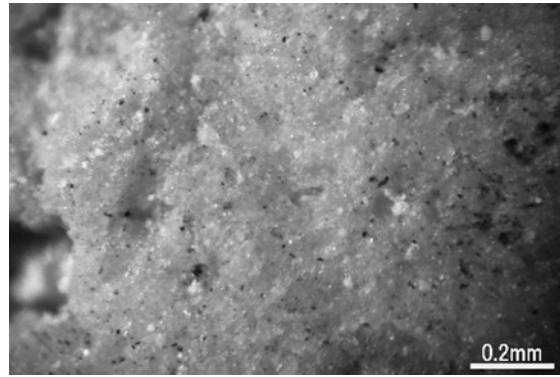
第3図1, 2, 4は、0.01~0.02 mmの微細な石英、長



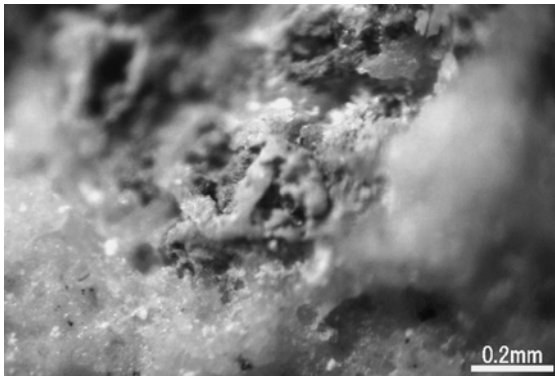
第2図 原資料2の展開写真



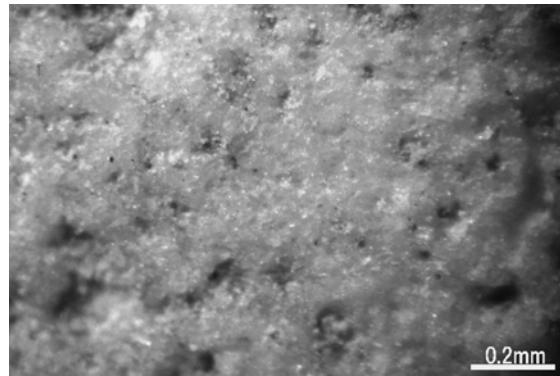
1 原資料1 ×80



2 原資料2 ×100



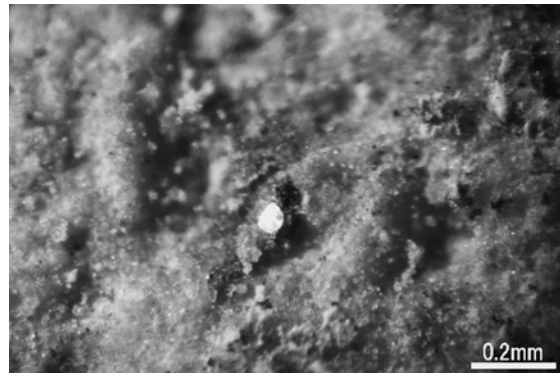
3 原資料3 ×100



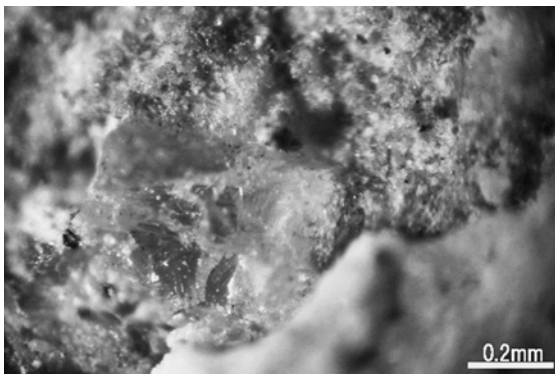
4 原資料4 ×100



5 原資料6 ×80



6 南牧村展示資料1 ×100



7 南牧村展示資料1 ×100



8 南牧村展示資料2 ×80

第3図 原康文氏寄贈砥石の実体顕微鏡写真

石類が集合していることがみられる。第3図2（口絵2-④）には、0.01 mm以内のごく微細な黒色の鉱物（金属鉱物？）が散在する。

第3図1は 0.2 mm、同7は 0.5 mmの斜長石斑晶と思われる（実体顕微鏡では他鉱物に変質しているかどうかの判断はできない）。第3図3は 0.3 mm、同5は 0.6 mm、同8は 0.2 mmの角閃石斑晶が他の鉱物に置き換えられている状態と思われる。第3図6は 0.05 mmほどの黄鉄鉱と思われる。

砥石8点ともよく似た岩相を呈しており、斜長石や角閃石の 0.2~0.6 mmほどの小さな斑晶を含み、基質は 0.001~0.03 mmほどの微細な石英や斜長石と思われる鉱物が集合する。帯磁率は $20.2\sim 13.5\times 10^{-5}$ SIの低い数値を示し、さらに南牧村展示資料2は 6.1×10^{-5} SIであった。

これらの特徴は、佐藤（2006）および佐藤・谷口（2007）の記述する岩石学的所見に矛盾しない。佐藤（2006）および佐藤・谷口（2007）によれば、南牧村の良質な砥石は、南牧村砥沢集落の南側に露出する径 1 km程度の岩株状貫入岩体・砥沢岩体の南端部で掘削されていた。砥沢岩体は鮮新世のデイサイト質浅所貫入岩体（デイサイト質ポーフィリー）とされており、大部分は熱水変質をうけて白色もしくは淡緑色で細粒な岩相となっている。斑晶は石英を含まず、0.5~3 mmの斜長石や角閃石を含み、熱水変質で炭酸塩鉱物や絹雲母などのやわらかい粘土鉱物に交代されているという。基質は細粒の石英（0.01~0.03 mm）や絹雲母などからなる。そして、本来含まれていた磁鉄鉱は他の鉱物に交代し、帯磁率が小さくなっている。

原康文家と福田家住宅

原康文氏宅は、下仁田町下仁田仲町に所在し、道路より少し奥に位置する。道路に面した場所は現在駐車場になっているが、その位置に江戸時代から明治時代まで続いた下仁田砥会所を経営した福田文右衛門家住宅と倉庫があったという。この住宅（砥屋んちと言われていた）が無住となった1975（昭和50）年前後に、原康文氏が旧住宅と大きな倉庫を解

体し、その際に砥石が出てきたという。

原康文氏によれば、原家と福田家は幾度も養子縁組をおこなって家を存続させた一族とのことである。原康文氏の2代前の原尚次郎氏が1870（明治3）年に福田家から原家に入り、さらに父・原真二郎氏も1926（昭和元）年に福田家から原家に養子で入って原家の家督を継ぎ、翌年には実父の死去に伴い福田家の業務も引き継いだという。原康文氏はこのような深い関係から、江戸期から続いた福田文右衛門家宅の整理にあたった訳である。

下仁田砥会所の存在と「下仁田の道」

下仁田砥会所については、文献が少なく、以下に今井（2004）の研究を要約する。江戸時代の初期に砥沢村一帯が幕府直轄地になって市川半兵衛が砥山の請負人となり、御蔵砥あるいは上野砥といわれた。最初は富岡町（富岡新田）の砥蔵屋敷が中継地として江戸に運ばれた。その後、成立年は不明であるが下仁田宿に砥会所ができ、富岡町への中継所となった。富岡の砥蔵からは需要に応じて、烏川の藤ノ木河岸や八丁河岸から利根川を舟便で江戸へ輸送された。

砥山の請負人は、砥沢の市川半兵衛家が1623（元和9）年から1728（享保13）年までおこない、その後を福田文右衛門が担ったので、少なくとも1728年より以前から下仁田砥会所は存在していたと思われる。福田家の砥山経営は1788（天明8）年までで、その後は砥会所のみを経営となり、明治期まで続いたという。

南牧村砥沢から江戸へ向かう運送路は江戸時代の初めから整備され、中山道の脇往還としての下仁田道となった。下仁田道は上州と信州を結ぶ交通路の主要なもの1つで、中山道本庄宿から下仁田宿に至り、ここから和美峠みち、香坂峠みち、内山峠みち、余地峠みちの4方向に分岐する。群馬県教育委員会（1981）によるとこれらのみちを総称する特別な名称はないとされており、1本の道でもないのが下仁田ジオパークのテーマ・ストーリーでは「下仁田の道」と表現しており、ここではそれに従う。

下仁田の道は、江戸時代には中山道の脇往還として、通行の規制が大きい街道を避けた遠来の通行や荷物の輸送だけの用途だった訳ではない。

西上州の特産物

下仁田は、村のあるいくつもの谷筋が集まる谷口集落である。この地域の特産としていたものに、砥沢の砥石と並んで麻があげられる。井上（2004）によれば、江戸時代の上州麻のなかでも西上州の麻はことに良質であったので、彦根藩が奨励した近江高宮布の原料として早くから取引されていた。はじめは江州（近江）商人の手に寄ったが、元禄（1688～1704）以降になると在方麻荷主（生産地の問屋商人）があらわれ、下仁田には桜井家など9軒があったという。このように、下仁田宿はこの地域の特産とする麻やほかに絹、たばこ、紙などの集荷市場として栄え、さらに本宿と下仁田は佐久地方からの米の米市場でもあった。

このように下仁田宿が市場として栄えた要因として、中島（2001）は「下仁田が四通八達した交通の利便性があり、信州に通じる峠越えが容易であること、さらに北国街道や甲州往還に直結していて、交通の規制が弱かったことで、下仁田道は庶民の道・商人の道として多くの人びとに利用された」としている。

まとめ

原康文氏から寄贈された南牧産砥石8点の石材記載をおこなった。小さな角閃石、斜長石の斑晶を含む緻密質な石材のデイサイト質ポーフィリーとされるものである。粗い整形痕が表面に残るものであり、江戸時代後半～明治時代の手加工の製品と思われる。原家に隣接した倉庫と屋敷を解体した時に見つかったもので、下仁田砥会所を運営していた福田文右衛門の家に伝わったものと思われる。

江戸時代の下仁田は南牧・砥沢産の砥石の中継地

として下仁田砥会所が栄え、また西上州一体で生産される上州麻などの集荷市場となっていた。下仁田の道は、下仁田を通り、和美峠みち、香坂峠みち、内山峠みち、余地峠みちの4方向につながり、中山道の脇往還としての存在だけでなく、鑄川の支流にそって西上州の特産品が集まる谷口集落として繁栄した。原康文氏寄贈の砥石は、近世～近代にかけて栄えた下仁田の歴史を伝える数少ない歴史資料である。

謝 辞

原康文氏ならびに原恵美子氏には下仁田町自然史館に砥石6点を寄贈していただき、本稿執筆にあたっては数多くのご教示をいただいた。南牧村教育委員会には、南牧村民俗資料館保管の砥石の記載の許可をいただき、下仁田町歴史館には文献閲覧の便宜をはかっていただいた。さらに、査読者の指摘によって本稿の内容は向上した。これらの皆様に記して厚く御礼申し上げる。

文 献

- ジオパーク下仁田協議会テーマ・ストーリー検討委員会・ガイド部会（2022）下仁田の大地 3つの魅力ーボトムアップでつくったジオパークの新テーマとストーリーー。下仁田町自然史館研究報告，7，65-68.
- 群馬県教育委員会（1981）下仁田道。群馬県歴史の道調査報告書，10，86p.
- 井上定幸（2004）近世の北関東と商品流通。岩田書院，410p.
- 今井幹夫（2004）砥会所。群馬歴史散歩，183，38-40.
- 小山正忠・竹原秀雄（2014）新版標準土色帖 36版。富士平工業株
- 中島 明（2001）下仁田の市と下仁田道。山田忠雄監修，中山道武州・西上州・東信州，街道の日本史17，93-99.
- 佐藤興平（2006）砥沢岩体の帯磁率と化学組成：砥沢鉱床の成因に関する予察的検討。群馬県立自然史博物館研究報告，10，63-80.
- 佐藤興平・谷口政碩（2007）砥沢岩体の粘土鉱物：X線粉末回析法による予察的検討。群馬県立自然史博物館研究報告，11，43-52.

(要 旨)

中村由克（2022）原家砥石の石材と下仁田砥会所―「下仁田の道」に係る歴史資料―. 下仁田町自然史館研究報告, 7, 37-42.

下仁田町の原康文氏寄贈の南牧村砥沢産の砥石8点の石材を実体顕微鏡で観察した。斜長石や角閃石の 0.2~0.6 mmほどの小さな斑晶を含み、基質は 0.01~0.03 mmほどの微細な石英や斜長石と思われる鉱物が集合する。佐藤（2006）がデイサイト質ポーフイリーとし、熱水変質により他の鉱物に置き換わっているとされている記載に矛盾しない。これらの砥石は、近世~近代の下仁田砥会所を経営した福田文右衛門に関連した数少ない歴史資料である。